



Title	日本語における修飾現象の再整理
Author(s)	段, 建秀
Citation	研究論集, 23, 253 (左) -268 (左)
Issue Date	2024-01-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.23.l253
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91096
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_rjgshhs_23_p253-268_l.pdf



日本語における修飾現象の再整理

段 建 秀

要 旨

修飾は日本語の文成分の中で重要な機能であり、従来の研究ではその中身の形態や意味から様々な検討が行われた。本稿では、修飾を中心に、先行研究に基づき、連体修飾と連用修飾を分けており、それぞれの形態、意味、機能についてもう一度整理を行った。一般言語学の観点から、連体修飾は形容詞で、連用修飾は副詞であると認識されている。本稿では、これを大前提とし、連体修飾成分を「形容詞類」とし、連用修飾成分を「副詞類」として記述を行った。その結果、形態上から連体修飾に属さなくても、意味的には修飾にあたることがある。これにより、連体修飾の形態と意味・機能がずれているところがある。また、ある語句は連体修飾か、連用修飾か、場合によって変わることがあり、連続性を持っていることがわかった。

1. はじめに

「修飾」は、日本語の文法上、文成分の重要な機能としている。修飾を単純に理解すれば、ある語句が他の語句を限定したり詳細に説明したりすることである。

- (1) 赤い花
- (2) 片足で走る。

(1) の「赤い花」であれば、「美しい」「赤い」「昨日咲いた」「公園の」などのように「花」に関わるさまざまな事象の中から「赤い」を選択して花の色を限定している。(2) の「走る」のみであれば、そのスピードとか、走る方法とかを問わず走ることを指し示すが、「片足で走る」は、元の「走る」より付加的な情報を表して修飾している。ここでは「赤い」は修飾語で、「花」は修飾される成分なので、修飾語と呼ばれる。文法構造の分析からみると、前者は「補部」、後

者は「主要部」である。日本語における補部は主要部の種類により、(1)のように修飾語が名詞類に係っている連体修飾語と、(2)のように修飾語が用言類に係っている連用修飾語に分けて考えることができる。

「連体修飾」と「連用修飾」というのは日本語の二つの基本構造であり、それぞれの形態と意味の考察、ある修飾現象そのものの意味機能、使用状況など、これまで多くの研究者により、様々な視点から提案されてきた。そのなかで、連体修飾と連用修飾の形態、意味についての整理の考察は多くの関心を集めた。本稿ではある修飾という言語現象に重点を置くのではなく、修飾そのものを全体的に巡り、先行研究に基づき、連体修飾と連用修飾の形態・意味・機能から整理を行っていく。

2. 先行研究

修飾は日本語の文法上、文成分の重要な機能のひとつとされている。これまでの研究では、修飾についてさまざまな視点から触れているものがある。ここでは、先行研究において修飾に関連するものがどのような扱いを受けてきたかについて検討していく。

「修飾」という用語について、工藤真由美(2002)、村木(2012)などによると、連体修飾語を「規定語」、連用修飾語を「修飾語」と呼んでいるが、本研究ではいずれも「修飾」という用語を用い、「連体修飾」と「連用修飾」とする。

日本語記述文法研究会(2003)は「文の成分の各論」という部分で、修飾語を「事態の成り立ち方をさまざまな観点から限定するものである」と定義し、修飾語は事態の成立には必須ではないことを指摘した。また、主語と補語と異なり、修飾語は多様であり、その語彙的意味により、「結果の修飾語」「様態の修飾語」「程度の修飾語」「量の修飾語」「時間関係の修飾語」に分けられた。一般に、言語の階層としては、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論といったものが存在している。しかし、日本語記述文法研究会での修飾は連用修飾の意味論の観点のみを扱い、形態上が混乱している。また、連体修飾を「規定語」と呼び、「名詞を修飾し、その語彙的な意味に対して、限定したり説明をくわえたりする」と定義し、形態上から「この」「所長の」「やわらかい」「しらない」「旅先からの」という例を簡単に挙げており、具体的分析を考慮に入れなかったのである。

寺村(1991)では、「要素の主従的結合」という節で修飾に関して触れている。寺村は、文の内部構造を、主要素が名詞であるか、述語詞であるかによって「連体」と「連用」とに分けている。名詞を主とする主従的結合を連体、述語を主とする主従的結合を連用と呼んでいる。主従的結合の構文と意味を考えようとするときに、少なくともその内部の構造の形式的な仕分けと「主従」関係の意味の内容という二つの角度からの観察が必要であると主張した。また、意味の内容から連体と連用を通じ、その主要素へのかかり方をその従要素としてそれぞれ「補充」

と「修飾」二種類に分け、述語にとって「補語」を「必須的な補語」と「副次的な補語」とを区別する必要があると指摘した。また、それに加え、連体修飾をそれぞれの働きをする形態には、①名詞＋ノ；②名詞＋格助詞＋ノ；③副詞＋ノ；④その他の形＋ノ；⑤連体詞；⑥名詞的形容詞（名容詞）＋ナ；⑦動詞、形容詞の確言形（基本形とタ形）のように整理しそれぞれを分析した。連用修飾を「名詞＋格助詞」、「時を表す名詞（＋格助詞）」、「数量を表す名詞」「名詞的形容詞（名容詞）＋二」「形容詞連用形」「動詞テ形」「動詞連用形」「引用形式」「副詞」「その他」のように整理した。

連体修飾は以上の種類の他に、寺村は「名詞、あるいは名詞的形容詞が連体助詞を介さず、あるいは形容詞の語幹や動詞の連用形が、直接に名詞に前接すると、結合度が強くなり、全体が一語化して、複合名詞ができる」というものもあるが、複合名詞において要素間の関係については形態論、語形成上の領域と指摘した。ところが、ここで疑問に思うのは、「堂々とした態度」「ゆったりとした環境」「ちょっとしたプレゼント」というような「名詞＋とした＋名詞」、「名詞＋した＋名詞」という形のもの、動詞の連体形（基本形とタ形）のほかの「テイル形」という用法、「最大割引」「高級果物」のような複合名詞の具体的な扱い方が考慮されていないことの3点である。

寺村の連用修飾の中で「名詞的形容詞（名容詞）＋二」の「名容詞」は現在学校文法によって通常は「形容動詞」と呼んでいる。それについての連用修飾は「二形」以外に、「＋デ」でも連用修飾の一種と考えられる。また、ここで扱っている「形容詞連用形」については、寺村（1991）は「はやくしゃべる。」「彼はそのことをおかしく思った。」「激しく攻撃する。」のように「連用形テ形」のみ取り扱っているが、「はやくて」「はげしくて」のように形容詞の連用中止法も連用修飾の働きも果たせる。「動詞連用形」の連用修飾の部分は寺村（1991）が最後まで完成していなかったが、「クリカエシ」「泣キ泣キ」の例だけあげている。「食べて」「登って」のように連用修飾が行われるので、「連用形テ形」も考慮すべきだろうと考える。以上のように、連用修飾の部分においては寺村の連用形の部分は修正すべきところがあると考ええる。

加藤（2003）は、修飾の定義について詳しく検討している。修飾を「意味的修飾」の以外に、「構造的修飾」「機能的修飾」にも分けて捉えている。

- (3) 赤い花
- (4) その人
- (5) 美味しい桃
- (6) とても喜ぶ

加藤（2003）

その中において、意味的修飾は、たとえば、(3)(4)の「赤い」や「その」が後続する「花」

や「人」を限定しており、意味に着目し、その論理的外延が狭まっているということである。構造的修飾については、構文を「主要部」と「補部」に分け、補部が主要部に対して有する関係が「構造的修飾」と呼ばれる。たとえば、「美味しい桃」の文法的性質は「桃」と同じであり、「とても喜ぶ」の文法的性質は「喜ぶ」と同じである。いわゆる、「桃」や「喜ぶ」が主要部になっており、「美味しい」や「とても」が補部である。機能的修飾は文において語や句がどういう働きを有しているかという観点から捉えた修飾である。たとえば、(5)のように名詞句や、(6)のような動詞句では、「美味しい」が「桃」を、「とても」が「喜ぶ」を、意味的にも、機能的にも修飾している。加藤(2003:15)では、個々の具体的な検討はそれぞれ連体修飾と連用修飾に分けて行い、その場合に機能的修飾という概念は構文分析上重要なものであると指摘した。

(7) 帽子を軽く叩く。

(8) 帽子を軽く作る。

井本(2020)

井本(2020)では、形容詞の連用修飾の未確定性をどう捉えるかについて、連用形形容詞の未確定性の解消と同時に、多種多様な修飾関係を構成することになっているため、「詳述指定機能」を提案した。この提案は加藤(2003)が指摘した「機能的修飾」と通底するとしている。「機能的修飾」は構文上の分析上不可欠であることが明確になったと思われる。

渡辺(1996)によると、「名詞に格助詞がついたもの」、「用言の連用形」、「副詞」を連用の職能を有するものとしている。

(9) きっと成功するだろう。

(10) 珍しく四月に雨が降った。

(11) 昨日、努力した。

(12) とても美しい。

(13) 雨にしっかりぬれる。

北原(1981)

北原(1981)は、連用修飾成分を「(9) 陳述修飾成分」、「(10) 叙述修飾成分」、「(11) 時修飾成分」、「(12) 程度修飾成分」、「(13) 状態修飾成分」に分類している。また、益岡・田窪(1992)では、連用修飾とする副詞の分類を「様態の副詞」、「程度の副詞」、「量の副詞」、「テンス・アスペクトの副詞」、「陳述の副詞」、「評価の副詞」、「発言の副詞」などをあげている。

修飾に関する先行研究はまだ色々があるが、本稿ではここまでにする。先行研究は連用修飾

語の多様な形を扱うことが多い。本研究では先行研究に基づき、足りない部分を補足または批判し、整理していき、修飾を「連体修飾」と「連用修飾」に分けてそれぞれにつき検討することにより、修飾の中身を究明していく。

3. 連体修飾

3.1 連体修飾とは

連体修飾は、名詞（体言）を修飾し、その語彙的意味を限定したり説明を加えたりする。一般言語学では、被修飾語は主要部で、修飾語は補部である。日本語における補部とする連体修飾は、必ず主要部に先行する。

(14) 静かな公園

(15) *公園静かな

(15)は主要部が補部に先行する例で不適切であるが、通常の日本語においては非文であるが、例外的に使える場合が存在する。たとえば、話し言葉の場合では後ろに出現できるという現象が成立することがあると考える。もし「静かな公園に行きたい」という意味を発話する場合に、「いききたいなあ、公園、静かな」というと、文が適切になる。「公園ね、静かね、…があってね…」という時にも成立すると考える。これは、「後置」という現象に当たる。

(16) 去年太郎が両親からもらったプレゼント

また、日本語の場合に連体修飾節の内部における語順が比較的に自由である。(16)の「去年太郎が両親からもらった」という節は、以下のように内部で任意の順序が変化しても適切であり、意味も変わらないのである。

(17) 太郎が去年両親からもらったプレゼント

(18) 両親から去年太郎がもらったプレゼント

(19) 太郎が両親から去年もらったプレゼント

3.2 連体修飾の形態的特徴

次に、日本語の連体修飾を形態的特徴、意味的特徴からそれぞれに整理する。寺村（1991）では、連体修飾を形態の視点から分類を行った。

- (20) 【名詞＋ノ】 私の辞書
- (21) 【名詞＋格助詞＋ノ】 父からの手紙
- (22) 【副詞＋ノ】 しっかりのヨガ
- (23) 【その他の形＋ノ】 知ってのこと；飲みながらの；～すればの
- (24) 【連体詞】 ある日；ある人
- (25) 【名詞的形容詞＋ナ】 静かな街
- (26) 【動詞，形容詞の確言形（基本形とタ形）】 食べたパン；小さい蟻

例は寺村（1991）による

日本語における修飾成分は「句」や「節」の境界が曖昧で不明確なため，本研究では，「修飾語句」という用語を用いずに，語，句，節をまとめて広義に「連体修飾」という用語を使用する。連体修飾を行う「関係節」も形態的に連体修飾の1つとみなされる。

- (27) ちょっとしたプレゼント
- (28) ちょっとのプレゼント
- (29) *このプレゼントはちょっとする。

加藤（2003）

加藤（2003）では，以上の「ちょっと」の例を挙げ，「ちょっとした」は，単純に「ちょっとする」という複合動詞の連体形と見ることができずに，「ちょっと」のように，「した」は「ノ」のように後接させて連体修飾の機能も果たせると指摘した。次は加藤（2003）によると，連体修飾の形態上から整理したものである。

表1 加藤（2003：19）

①動詞	A. ル形 B. タ形 C. テイル形 D. その他の形式
②形容詞	A. イ形 B. タ形 C. その他の形式
③名詞	A. 「XのY」 B. 「XなY」 C. 「XとしたY」 D. 「XしたY」 E. 「XたるY」 F. 「X（と）しているY」 G. 「XなるY」 H. 「その他の形式」

加藤（2003）では，動詞，形容詞，名詞により，連体修飾のさまざまな形を分類した。表1の中で一般的連体修飾に認識されやすい「ノ」「ナ」の以外に，「とした」，「した」，「たる」「（と）している」「なる」のようなものに分類を入れた。その中の「XたるY」「XなるY」という形式は，実は「連体詞＋名詞」に属するものである。

寺村（1991）の連体修飾の形態的分類をまとめて観察すると，「名詞＋ノ」「連体詞」というものは加藤（2003）の表1の「③名詞」に並行すると言える。「動詞，形容詞の確言形（基本形

とタ形)」も表1の①動詞②形容詞に属すると考える。しかし、寺村は動詞、形容詞、名詞の以外に「副詞+の」、「飲みながらの」のような「その他の形+ノ」を指摘しているが、このようなものの扱いはどうであろうか。例えば、「かつての名選手」、「全くの初心者」のように、元々は副詞であり、主に単独で連用修飾を行う機能を持っている。いわゆる、ここで形態的には「かつて」「しっかり」のようなものは名詞と見做し、「ノ」を介することにより、名詞として名詞を修飾したり、副詞として動詞のような用言を修飾したりすることができると考えられる。そのため、寺村の「副詞+ノ」「その他の形+ノ」を加藤の表1の③名詞に属する。

そのほか、寺村の「名詞的形容詞（名容詞）+ナ」というものは、学校文法では通常この形式を「形容動詞」と呼び、これは形容動詞と名詞の品詞の問題である。今まで学校文法以外に、大概文法、山田文法や時枝文法では「形容動詞」を立てなかったのである。ここでは、形容動詞を「名詞」に入れて取り扱い、「名詞+ナ」の形で連体修飾の働きを果たす。

また、表1の③名詞の中で、以上に述べた「名詞+ノ」「名詞+ナ」の以外に、「XたるY」「XなるY」という「連体詞+名詞」の形も含めている。連体詞は品詞の1つであり、自立語で活用もできず、通常は連体修飾のみとして働いた語である。日本語の連体詞と認定されるものはたくさんあるわけではない。一般的に、「連体詞」とされる語は、主に、「この、あの」のような指示詞、「ある」「あらゆる」などのようなもの、「単なる」「大した」などのようなもの、「大きな」「小さな」などのような形容詞から転換されたものがある。一般的には、一つのことだが、連用形、連体形や終止形を持っている。連用形の場合は副詞になり、連体形の場合は形容詞になり、終止形の場合は叙述の働きに当たるのが普通である。しかし、連体詞の連用形や終止形が欠落しており、ほとんど連体形しか持たなかったのも、通常は連用修飾の機能や叙述の用法になるわけではないと考えられる。

表2 連体詞の活用について

	連体形	連用形	終止形
大きい	大きい	大きく	大きい
大きな	大きな	大きに (大いに)	なし
単なる	単なる *単な	単に	*単だ
主たる	主たる		
主な 主なる	主な 主なる	主に	主だ

例えば、形容詞「大きい」は連体形と終止形が同じで「大きい」であり、連用形は「大きく」である。連体詞「大きな」は、連体形がむろん「大きな」であり、連用形が実は「大きに」というのを使用できるが、「*大きだ」という終止形いわゆる叙述の使用は一般的にはいえない。

つまり、「大きな」は終止形がないのである。ここにおける「大きに」というのは使用できない際に、「大いに」として同じように扱うことができると思われる。いわゆる、連体詞の中にも「大きな」のように終止形は存在しないが、連体形と連用形だけがあるというものがある。そのほか、「単なる」は、連用形が「単に」であるが、「単だ」という終止形は持ってない。「単なる」は、元々連体形が「単な」になると良いが、「単な」は普通に使えないため、古くから残っているのは「単なる」になる。また、「主」の場合には、連体形は「主たる」「主な」であり、連用形は「主に」であり、終止形は「主だ」である。そのため、連体詞は単語により、連体形、連用形というのが全部揃っているものと揃っていないものが存在する。

その中で連体形に対応する連用形の形式が変わることがわかるようになる。連体詞そのものとその連用形の関係はどのように扱っているのかはまだ問題が存在する。

また、表2を観察すると、「単に」、「主に」、「主だ」という連用形と終止形があると記述したが、厳密にいうと、あるとは言えないと思われる。「単に」が対応する連体詞は「* 単だ」であり、「主に」「主だ」が対応するのは「主な」である。そうすると、「単なる」「主たる」は連用形と終止形があるとは言えないと考える。いわゆる、連用形と終止形をいずれも持っている語は連体詞ではなくなるということである。

加藤（2003）表1では③名詞の中の「X+とした」、「X+した」、「X+（と）している」、「X+たる/なる」という形式を名詞の範囲に入れている。加藤（2003）では、「タ」が付くことにより、その全体として形容詞に相当するとしている。そうすると、上記の表1の中の「X+とした」、「X+した」、「X+としている」という形は、全体で形容詞の機能を持って名詞Yを修飾している形式とみなされる。全体をまとめてみると、統語構造や機能からみると、名詞を修飾する機能を持っている形容詞に近いと考えられる。一方、「ちょっとしたプレゼント」とか、「堂々とした態度」とかは「ちょっとした」、「堂々としている」を単独に叙述という用法を持たず、連用修飾の機能がなく、動詞としても使わないのである。連体詞は一般的には連体形しか持たなく、叙述、終止形、連用形として使える形式がない。いわゆる、このような場合は形態上から考えると、実は連体詞の性質に近いのではないと思われる。本稿ではここで形態の分類に「連体詞」というもう一つの範疇を設けることにより、記述的にさらに経済的になると考える。

また、名詞、あるいは形容動詞の語幹などが助詞「ノ」を介さずに、直接に名詞に前接すると、複合名詞を結合できる。例えば、「最大割引」、「高級果物」「核融合」などがある。これは、形態上では連体修飾ではなく、意味上からの修飾とは言える。「最大割引」というと、アクセントの単位としてはアクセント核が1つだけあるが、「最大の割引」とすると、「最大の」と「割引」はアクセント核が2つある。音声的と音韻的からみると別々のものである。また、「最大」と「最大の」はそれぞれに「語」と「句」であり、レベルが違うのである。そうすると複合名詞としては議論できないのである。

連体修飾の形態は、修正して整理すると、以下のようになる。

表 3

動詞	A. ル形 B. タ形 C. テイル形 D. その他の形式
形容詞	A. イ形 B. タ形 C. その他の形式
名詞	A. 「X の Y」 B. 「X な Y」 C. 「その他の形式」
連体詞	A. 指示詞 B. 「ある」「いわゆる」など C. 「X+した/たる/としている/なる」など、 D. 形容詞からの転換のもの（大きな） E. その他の形式
関係節	述部のような要素を含むもの（例えば：うまく実行した計画）

3.3 連体修飾の意味と機能

連体修飾は後接する名詞要素を限定したり、付加的な情報を加えたりすることである。連体修飾の種類によって、意味的に限定されるかどうかが異なる。「ノ」によって結び付けられた二つの名詞の意味は多様である。従来の研究ではさまざまな分類が行われたが、あまり意味があるとは思われないため、本稿はそこまで展開しなく、以下の典型な3つの種類のものを提起する。

(30) 父親

(31) 私の父親

(32) 誰かの父親

加藤 (2003)

(33) 偽の父親

(31) は (30) より意味が限定され、集合の中で合致するものが減少され、論理的外延も狭まったと考える。(32)「誰か」がつくことで意味が全く限定されず、論理的な外延も狭くなっていない。しかし、国文法では、連体修飾成分とみなされてしまう（加藤 2003）。「誰かの父親」の場合に、父親が6人いることを仮定すると、この6人とも全部「誰かの父親」に想定できる可能性がある。集合の中で合致するものが変わらない。(33)の「偽の父親」だとすると、「偽」なので、集合の中から外側に出る場合になる。同じようなものは「嘘の」「逆の」などのものがある。

修飾に関しては、もし名詞を修飾できれば、基本的には形容詞の働きとも言えると考えられる。しかし、名詞と名詞が結合するような、いわゆる複合名詞の場合にはどのように扱うのかは難しい問題点である。上に述べた「最大割引」という例を再掲する。

(34) 最大の割引

(35) 最大割引

(34) (35) は異なるカテゴリーで、構造は違っている。一番安い割引を表している場合には、普通には「最大の割引」という。これに対して「最大割引」という4つのものがくつつく複合名詞にも表せる。(34) の「最大の割引」の場合に、「の」がつくことによって連体修飾になる。(35) の場合に一般的には「最大」と「割引」という2つに分けて分析でき、意味的には修飾している。「最大」自体は基本名詞なので、二つの名詞が並ぶようなものは形態上では説明できないのである。統語構造から考えると、「最大」は形容詞のような機能を持っているので、形容詞成分としての扱いになると言える。また、「最大」は独立しては使われず、「最大割引」のようにまとめて取り扱うようになる。そうすれば、「の」がつくものは同じようになる。そのため、形態上から連体修飾に属さなくても、意味的には修飾にあたることがある。これにより、連体修飾の形態と意味・機能がずれているところがあることがわかる。

形容詞は一般的に連体修飾に専用するものと認識されている。また、形容詞の連体形に使われたのは、基本形のみではなく、過去形でも連体修飾ができる。

(36) 美しい花

(37) 美しかった花

形容詞は連体修飾とする場合には、一般的に、物事の形状、性質、特徴を描くものを属性形容詞と、喜怒哀楽の感情を表すものを感情形容詞に大きく分けられる(寺村 1991)。その中の属性形容詞では、「赤い」とか、「四角い」とか、「丸い」というような客観的な評価をしている形容詞の意味は普通には大きく変わらない。しかし、「美味しい」とか、「大きい」とか、「多い」とかというようなものは人によって判断が違う場合がある。つまり、主観による差が発生することで形容詞の意味の確定は難しくなる。ほかの「かなり」「たくさん」などという単語は連体修飾としても、連用修飾としても、主観による差も出てくる場合がある。そのため、構文の分析は何か基準を事前に決めておく必要があり、個人差の違うことを考慮に入れることも必須である。また、形容詞の装定と述定の場合との意味的な違いを考える必要があるが、どちらかにしか使えないものか、両用法で明らかに意味が違っているものなのかについては今後の課題とする。

動詞は、事物の動作、作用や状態を表し、主に述語を中心にする構文を構成するものである。名詞を修飾する役割は副次的と言える。連体修飾とする動詞は、連体形の基本形だけでなく、過去を表すタ形、テイル形も同様である。

3.4 まとめ

以上のように、連体修飾を形態、意味からそれぞれ整理し、その中で、連体詞というカテゴリーを設けた。実は、連体詞は単語により、連体形、連用形というのが全部揃っているものと

揃っていないものが存在するということである。もし連用形と終止形をいずれも持っている語は連体詞ではなくなるということである。ここでは連体詞の詳しい内容の整理を試みた。

一般言語学的には、修飾を受けている名詞を主要部とし、修飾成分を補部としている。また、普通は、連体修飾は形容詞で、連用修飾は副詞であると認識されている。以上の連体修飾の概観から考えると、連体修飾成分は形態上様々な形式を持っており、意味機能上としては、単独でも、全体的なまとめとしても、構造的に「形容詞句」、「形容詞節」とは言えるので、連体修飾を「形容詞類」と位置づけられる。また、形態上から連体修飾に属さなくても、意味的には修飾にあたることもある。これにより、連体修飾の形態と意味・機能がずれているところがあると言える。

4. 連用修飾

4.1 連用修飾の分類

連用修飾は用言、あるいは述部にかかる部分である。連用修飾の位置は連体修飾と同じで、一般的には修飾語は被修飾語に先行するが、(39)のような話し言葉では、修飾成分が、述部の後ろに出現することが少なくない。

(38) このパン、すごく美味しいよ。

(39) このパン、美味しいよ、すごく

4.2 連用修飾の形態と意味機能

小池ほか(1997)では、連用修飾は、語レベルから「副詞」、「形容詞(連用形)」、「形容動詞連用形」に分類した。加藤(2003)では、その中が含まれない「動詞の連用形」、「数量詞遊離のように名詞が単独で連用修飾している用法」を補足し検討した。寺村(1991)でも、表2のように、連用の働きを有するそれぞれの形式について分析した。連用修飾が、連体修飾より複雑であり、様々な問題点が含まれている。

(40) ①「Xと」 ②「Xに」 ③「Xで」 ④「Xとして」 ⑤「X」

加藤(2003: 503)

加藤(2003)では、連用修飾の形態については、ある語や形態素に関する形態になるという完全に記述できる立場を取らず、修飾の形態そのものがある種の意味や機能を担っており、形態や活用形で、(40)のように連用修飾の形態を整理した。

本稿では、連用修飾を語や形態素の立場と、修飾の形態そのものを大まかに整理する。

まず、以下のように連用修飾の例を挙げてみる。

- (41) 【名詞＋格助詞】 学生たちが英語を学んでいる。
- (42) 【時を表す名詞（＋格助詞）】 今日5時提出した。
- (43) 【数量を表す名詞】 学生が30人入部してきた。
- (44) 【名詞的形容詞（名容詞）＋に】 容器に静かに注ぎ込む。
- (45) 【形容詞連用形】 細かく調査する。
- (46) 【動詞テ形】 学校に歩いて行く。
- (47) 【動詞連用形】 1時間ほど歩き、帰った。
- (48) 【副詞】 ゆっくり話す。

先行研究で指摘したとおり、以上の連用形以外に、動詞と形容詞は連用中止法も連用修飾の一種だと認識されている。形容動詞は連用二形以外に、連用テ形も連用修飾である。加藤(2003)では、それぞれの二つの連用形と動詞の連用形をあげて考察を行った。

以上のようなものを語レベル、句レベル、節レベルで総括してみれば、以下のようになる。形容動詞の連用形は語レベルと見做されるのか、「名詞＋格助詞」と見做されるのか区別しにくく、問題点になる。

表4

語レベル	A. 「副詞」 B. 「一部名詞」 C. 「形容詞（連用形）」 D. 「形容動詞（連用形）」 E. 「動詞（連用形）」
句レベル	名詞＋格助詞
節レベル	連用修飾節

以上に述べていた連用修飾の形態の中に「動詞の連用形」「形容詞の連用形」「形容動詞の連用形」が入っているが、実はずれている場合もある。

- (49) 「英語ができて、優れている」太郎
- (50) 「高く、険しい」山
- (51) 「真面目で、親切な」社員

動詞、形容詞、形容動詞の連用形の「できて」「高く」「真面目で」における「て」「く」「で」で終わると、構造上の連用修飾節になるのである。しかし、節の一番後ろのところに「名詞」が来る場合に、名詞の内容の修飾とすると、実は連体修飾節になるのである。

(52) 昨日、努力した。(再掲 11)

(53) 体調が良かった昨日、努力した。

(53) の「体調が良かった昨日」の中で、「昨日」は自体名詞であり、「体調が良かった」という連体修飾節が「昨日」を修飾している。(52) 中の「昨日」が、副詞の働きをしており、連用修飾の機能を行っている。いわば、前に連体修飾をおくと、名詞の働きをしている。単独で述語にかかる場合に副詞の働きをしている。いわゆる、ある語句は連体修飾か、連用修飾か、場合によって変わることがあり、連続性を持っている。

副詞は、活用しない語、構文的に連用修飾にもっぱら専用される語と普通には認識される。従来の研究では、副詞を「様態副詞」、「程度副詞」、「陳述副詞」の3種に分けていることは普通である。副詞のうち、連用修飾の機能を持っているものの意味的特徴の分類を重点に入れず、主に副詞が連用修飾として使える時の形態上から観察する。副詞は「しっかり」のように、単独で連用修飾の働きを果たせるが、単独で使わないものも存在する。

(54) 老爺は、辺りをはばかりの低声で、わずか答えた。

(BCCWJ 宮地裕 ほか著 光村図書出版株式会社 2005)

(55) 幼子のように柔らかに開かれた唇が わずかに震えていたから。

(BCCWJ ひちわゆか (著) ラブ・ミー・テンダー ビブロス 2001)

例えば、「わずか」は副詞として連用修飾している際に、単独で「わずか」で用いられる場合があり、「わずかに」のように、「に」の付加で文が自然になる場合もある。そのほかは、「堂々」のそのものの連用修飾形態としては「堂々と」のみ使える。いわゆる副詞が連用修飾として使えるものは、一部がそのまま使えるが、一部が「に」、「と」などのものを付けることが必須である。「に」「と」などをどのように扱うかは議論しないといけない。

加藤 (2003) は副詞だけではなく、連用修飾成分は全般に、名詞と共通する性質を持っていると考えなければならないとしている。名詞類、副詞類を「実詞」という品詞グループに分類した。ここにおける「に」「と」などのようなものは、名詞的要素についたものと解釈し、「に」「と」などのものの前の部分を「実詞」として扱った。また、「に」「と」などのものの選択は、その連用成分の意味に左右されており、それぞれの意味的な要因に関わっていることを指摘した。

また、名詞類に属するものには学校文法でいう「形容動詞」がある。その連用形は連用修飾ができる。まず、形容動詞の連用形を確定する。基本形は「きれいだ」の場合に、連用形は「きれいだっ」と「きれいに」と「きれいで」という三種類がある。ここで形容動詞の連用形の連用修飾の機能を考える上で必要なのは、「きれいに」と「きれいで」という二種類である。動詞

の連用形の呼び方に従うなら、前者は「連用二形」、後者を「連用デ形」と呼んでいる。従来の研究においてほとんど「形容動詞」にあたる品詞を立てていないことが一般的である。本稿では、形容動詞が名詞と連続的関係を持っていると考える。形容動詞の語幹は自立しており、単独で「の」「な」が付くことで名詞を修飾できており、名詞の性質を持っていると思われる。また、形容動詞の連用二形と連用デ形の「に」と「で」は、語幹の後ろについているものと解釈できる。上述の名詞と副詞を同じカテゴリーに入れることと同様に、形容動詞を同じカテゴリーに入れると、構文分析の時に効率が良い。

形容詞の連体形は述語にかかる時に連用修飾ができる。述語が表す動きや様態の限定をより詳しく修飾している。形容詞の連用形については、例えば、「寒い」という形容詞の連用形は「寒く」、「寒くて」である。形容詞はそのものの意味は、一般的に属性形容詞と感覚形容詞に分かれる。また、客観的形容詞と主観的形容詞があり、構文分析上では主観の個人差を考慮しなければならない。

また、名詞自体は、そのまま連用修飾の機能を果たせるものが存在する。それは時を表す名詞と数量を表す名詞である。

- (56) 5時 {＊φ/に} 帰ります。
- (57) 明日 {φ/＊に} 出発します。
- (58) 30分前 {φ/に} 試験が始まった。

時を表す名詞は一般的に「に」を伴っているが、「に」がついていないものもある。しかし、「に」が付くことによって文が非文になるものもあり、ついてもつかなくても文が成立するものもある。

- (59) 学生が3人受験した。
- (60) ジュースを半分飲んだ。

数量詞は以上のように、連用修飾にも使われることが多い。また、数量詞の種類が多様で、一般的には3人のように類別詞を伴っているものがあり、「半分」のように類別詞を伴っていないものもある。

「名詞句」は連用修飾の形態の一つである。渡辺(1996)によると、連用修飾の機能を持っているものを名詞に格助詞がついたもの、用言の連用形、副詞を連用の職能を持っているものとしている。北原(1973)は、「体言+格助詞」などの補充成分と、用言の連用形と副詞など連用修飾成分を分けるべきとし、この補充成分は「名詞+格助詞」という品詞的な定義を提案した。「名詞+格助詞」の組み合わせにより、名詞句になると考えられる。また、「名詞+格助詞」に

における「格助詞」の範囲を決めないと判定できないように思われる。格助詞は名詞にかかわり、その名詞が構文の中で他の語と持っている関係を標示する。日本語の格助詞は主に、「は、も、に、が、の」などがある。名詞句は句レベルの連用修飾の一種として分析する。

4.3 まとめ

本節では、連用修飾についてその形態意味から整理を行った。その中で、ある語句は連体修飾か、連用修飾か、場合によって変わることがあり、連続性を持っていることがわかった。連用修飾の分類から観察すると、「形容動詞」を「名詞的要素」のグループに入れ、「名詞的要素」、「副詞的要素」を同じカテゴリーに入れて「体詞」として扱うことができる（加藤 2003, 2006a）。以上連用修飾の形態から各形式を概観し述べたが、また、意味機能上から根本的に考えると、形容詞および、動詞の連用形でも、名詞句でも、連用修飾ができる名詞でも、形容動詞の連用形でも、副詞でも、機能的にはいずれも副詞の働きにあたる。本稿では、連用修飾を「副詞類」と位置付けている。

5. まとめ

一般言語学の観点から、連体修飾は形容詞が専用であり、連用修飾は副詞が専用である。本稿では、これを大前提とし、連体修飾成分を「形容詞類」とし、連用修飾成分を「副詞類」として記述を行った。形容詞類は名詞を修飾できる専用の品詞という位置付けをすれば、「形容詞句」「形容詞節」というものもある。連体修飾の形式のうち、「体詞＋ノ/ナ＋名詞」、「動詞の連体形」、「形容詞の連体形」、「連体詞」、「連体修飾節」は、いずれも「形容詞類」に属する。また、例えば、「最大割引」は意味上からの修飾であるが、ここにおける「最大」は「形容詞成分」と見なすことができる。「最大の割引」と比べ、「最大」と「最大の」は同じで「形容詞」とし、「形容詞類」に入れることができる。副詞類は述語、用言類を修飾できる専用の品詞という位置づけをすれば、連用修飾ができる形式はいずれも、副詞の働きを果たすとはいえる。その様々な形態が「副詞類」に属する。しかし、その中で自体そのものが副詞の働きを持たず、文が非文か、不自然かになることがある。このような場合に、「に」「と」「で」などのようなものが付くことで、連用修飾ができるようになることがある。例えば、3人、5枚などの数量詞は、形態論的に自体が名詞であるが、名詞はそのまま副詞に置き換えられる。いわゆる、連体修飾の場合に、「ノ」を介して「形容詞類」になる。連用修飾の場合には「副詞類」になる。また、「最大」の場合には、形態論上それ自体が名詞として使えるが、「最大割引」「最大3つ」のように、形容詞になったり、副詞になったりすることがある。ある語句は連体修飾か、連用修飾か、場合によって変わることがあり、連続性を持っていることがわかった。

本稿では、今の段階では機能上から修飾を「形容詞類」「副詞類」という二種類に分けたが、

実際は修飾の品詞の中で個々の品詞についての問題が存在する。例えば、形態上連体詞を設けているが、機能上から考えている連体詞はまだ不整合なところがある。また、近年の日本語の研究で、従来の形態論的な基準からの整理より機能と意味に焦点をおく記述に移行してきている。今回は修飾についてその中身の機能上の仕組みについてはまだ深く検討していなかった。今後の課題として、品詞上の問題をめぐり、もう一度整理して修飾の本質を深く探っていく。

(だん けんしゅう・言語科学研究室)

参考文献

- 井本亮（2020）「形容詞連用修飾の未確定性をどう捉えるか」p.135-171 『日本語語用論フォーラム 3』
加藤重広・滝浦真人 ひつじ書房
- 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 北原保雄（1973）「補充成分と連用修飾成分」『国語学』95 pp.1-19
- 北原保雄（1981）『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 工藤真由美（2002）「日本語の文の成分」飛田良文・佐藤武義（編）
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法 1』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 渡辺実（1996）『日本語概説』岩波書店

『現代日本語書き言葉コーパス BCCWJ』

(<https://www.ninjal.ac.jp/database/type/corpora/>)